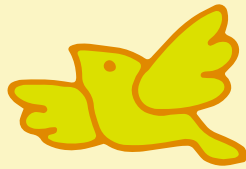




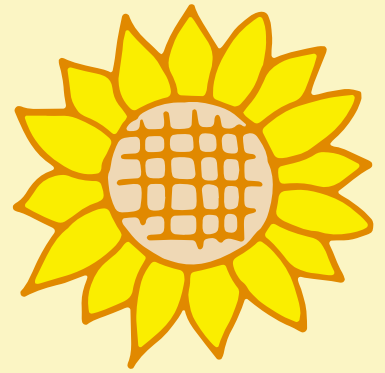
agriculture



farming



environment



農業・資源経済学 への招待

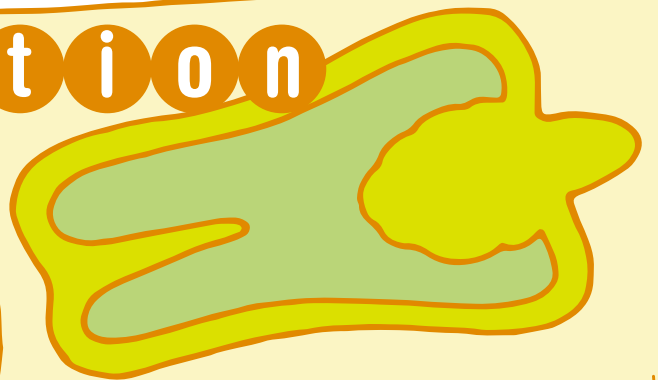
i n v i t a t i o n



food policy



economic development



history



東京大学農学部

農業・資源経済学専修

INDEX

農業・資源経済学専修のすすめ	1
農業・資源経済学の研究領域	2
農業・資源経済学専修の組織	4
ゼミの紹介	5
農業・資源経済学専修のカリキュラム	
農村調査概論	8
農業・資源経済学演習	8
地域経済フィールドワーク演習	8
農作業実習	9
卒業論文	9
大学院	
大学院の概要	10
修士課程大学院生の生活	10
卒業後の進路	
進路状況	12
先輩の声	13



農業・資源経済学専修のすすめ

「直ぐ役に立つ人間は直ぐ役に立たなくなる人間だ」。慶応大学理工学部の前身、藤原工業大学の初代学部長をつとめた谷村豊太郎は、実業界の「直ぐ役に立つ人間を作ってもらいたい」との注文に対してこんな具合に応えたという。そのとおり、まことにもって至言である。私たち農経（農業・資源経済学は昔からこう呼ばれている）の気質にも、おおいに通じるところのあるアフォリズムである。

諸君が農経に進学したからといって、急にあざやかに変身し、たちどころにつぶしが利くようになるわけではない。そんなことを期待してもらってはこちらも困る。専門の勉強であるから、多少のテクニックは伝授する。けれども、テクニックはあくまでもテクニックであって、これを磨き上げるところに農経の本領があるわけではない。むしろ、つぎの三つのことがらを心がけていただきたいと思う。

ひとつは事実を深く観察する力である。農経における事実とは、すべてが人間の行動にかんする事実である。人間が人間を対象とする社会科学では、自然科学とは異なって、実験を行うことが困難である。ここが社会科学のむずかしいところである。けれども、人間が人間を対象にするのであるから、みずからの経験に照らして相手の心情の一端を汲み取ることはできる。エンパシーである。ここが社会科学としての農経の強みである。農家の庭先でうかがい知ることのできる生産者の表情は、しばしばよく吟味された統計数字以上に、農村の事実を伝えるものである。イギリスの農村であっても、タイの農村であっても、事情はまったく変わらない。

事実のなかにパラドックスを見つけだし、パラドックスを解き明かそうとする精神。これが心がけていただきたい二番目のことがらである。例えばこんなパラドックスがある。8億を超える飢餓と栄養不良の人々を救うために行われる食料の援助は、ときとしてその意図に反して農業不振という逆効果を生んでしまう。なぜであろうか。こうした問いをみずから探し出してもらいたい。そして、みずから真の解答を探し求めていただきたい。解き明かすべき大小さまざまなパラドックスがあるからこそ、農経は依然として知的な刺激にみちた分野であり続けている。

みずから解答を探し求めるといっても、無手勝流でははなはだ効率が悪い。効率が悪いだけならばまだしも、勝手な思い込みでもって珍妙な解決策を振り回されたのでは、相手だって迷惑だ。そこで第三に、考える道具としての経済学を学んでいただきたい。知識としての経済学の学習にとどまっていはいけない。エレガントな証明だけがとりえのような経済学も、残念ながら農経とは無縁である。現実の社会の問題を考えるための骨太な道具、考えた筋道を的確に表現する頑健な文法、これが私たちにとっての経済学である。

ともあれ、農経に進学したとしよう。そこから先の2年はなんとといっても投資の2年である。一生をかけてじっくり収穫することのできる永年性の作物を、ひとつしっかり根付かせていただきたいものである。



農業・資源経済学の研究領域

農業・資源経済学と聞いて何を想像されるでしょうか？ 農業や自然環境は私たちの生活に様々な形で関わっており、農業・資源経済学が取り扱う分野は皆さんの想像以上に範囲が広いのです。また、国際化の進展や経済学自体の発展に伴い、農業・資源経済学のカバレッジは現在も広がり続けています。

農業は私たちの食料を生産する大切な役割を担う一方、自然環境や資源の適切な利用とも密接な関係を持っています。海外の国や地域に目を向けると、農業はそれぞれの社会に根ざしながら多くの人々の生活を支えています。とりわけ、開発途上国においては、農業を発展させることが、開発や貧困の問題に対する重要な課題となっています。人々の日々の生活を見つめ、農業に関する制度や政策が与える影響を理解し、複雑な経済の仕組みを明らかにする学問、それが農業・資源経済学なのです。

農業・資源経済学は応用経済学の範疇に入ります。しかし、単に机上の学問を用いるだけでなく、自らフィールドに立って新たな事実を発見し、それをアカデミックに解釈していくことが私たちの重視するアプローチです。現実に対する理解を基礎に、この学問分野のフロンティアを拡大していくことを目指しているのです。

農業政策・経済政策論

農業経営学

マーケティング

農業・農村金融論

農業史・経済史



環境経済学

国際貿易論

フードシステム論

ミクロ経済学

先進国経済論

農業・
資源経済学

農村計画学

マクロ経済学

マクロ経済学

開発経済学

計量経済学

比較制度論

農村社会学



農業・資源経済学専修の組織

教授

安藤 光義 (あんどう みつよし)

✉ ando[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農政学, 農地制度, 構造政策,
比較政策 (EU/UK)

教授

木南 章 (きみなみ あきら)

✉ akira[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農業経営学, イノベーション, 持続可能性

教授

小嶋 大造 (こじま だいぞう)

✉ akojima[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

政策研究, 食料・農業・農村政策, 財政・地方
財政, 比較政策 (EU/ドイツ)

教授

松本 武祝 (まつもと たけのり)

✉ amat[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農業史, 農村史, アジア研究

教授

齋藤 勝宏 (さいとう かつひろ)

✉ katsuhirosaito[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

国際貿易論, 産業連関論, 開発経済論

教授

中嶋 康博 (なかしま やすひろ)

✉ nakashima60[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

フードシステム, 食料・農業・農村政策

教授

櫻井 武司 (さくらい たけし)

✉ takeshi-sakurai[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

開発経済学, 農村開発論, アジア/アフリカ

准教授

八木 洋憲 (やぎ ひろのり)

✉ youken[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農業経営学, 農村計画学, 農業経営と地域

准教授

川崎 賢太郎 (かわさき けんたろう)

✉ kawasaki-kentaro[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

計量経済分析, 機械学習, シミュレーション
分析

准教授

中谷 朋昭 (なかたに ともあき)

✉ atn[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

フードシステム, 農業・農村の振興, 経済統計学

准教授

万木 孝雄 (ゆるぎ たかお)

✉ yurugi[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農村金融論, 協同組合論, 林業財政

助教

西原 是良 (にしはら ゆきなが)

✉ yukinaga-nishihara[at]g.ecc.u-tokyo.ac.jp

[主な研究テーマ]

農業経済学, 土地改良, 農業教育

ゼミの紹介

農業・資源経済学専修では、少人数でのゼミを中心として、きめ細かな指導を行っています。所属するゼミでのディスカッションを通じて、必要な知識やスキルを深めていきます。



安藤 光義 / あんどう みつよし (教授) ゼミ

ANDO Mitsuyoshi

農業・農村政策が農村の現場で実際にどのように実施され、どういった問題が生じているかを現地調査によって明らかにする研究を行っています。特に構造政策、農地制度を専門としています。学生には、①多くのテキストを読んで食と農をめぐる問題の理解を深めるとともに、②ゼミでの議論を通じて批判的な思考を身につけ、③現地調査によって農村の実情と政策の関係を明らかにするような卒業研究をしてもらえればと考えています。



写真はイングランドのヒース・ムーアとフットパス。

木南 章 / きみなみ あきら (教授) ゼミ

KIMINAMI Akira

農業経営学と関連分野の学問を基に、農業ビジネスや地域の資源・環境のマネジメントをめぐる社会的な課題の解決を目指した理論と実証の研究に取り組んでいます。特に、起業家精神、イノベーション、事業多角化、新規参入、農業法人、経営戦略、経営管理、人的資源管理、技術普及、持続可能性などに焦点を当て、実態調査などによる質的分析と計量モデルなどによる量的分析の研究方法を組み合わせながら、研究を進めています。



小嶋 大造 / こじま だいそう (教授) ゼミ

KOJIMA Daizo

食料・農業・農村およびこれに関連する政策研究を行っています。例えば、食料・農業・農村政策、財政・地方財政、比較政策(EU/ドイツ)などです。経済的な視点を基礎に、政治的・行政的・社会的・歴史的などの視点を取り入れた社会科学観から、食料・農業・農村政策にかかわる問題について、理論的・実証的な解明を行います。その手法として、現地調査や統計データを用いた分析を行います。



松本 武祝 / まつもと たけのり (教授) ゼミ

MATSUMOTO Takenori

農業史・農村史, とくに近代の朝鮮半島の農業史・農村社会史を, 主に文献調査にもとづいて研究しています。

歴史分析にせよ現状分析にせよ, 長期的視点をもって分析を試みる人を歓迎します。



上の写真は、中世田染(たしぶ)荘の景観を今に伝える大分県国東半島の農村風景。

中嶋 康博 / なかしま やすひろ (教授) ゼミ

NAKASHIMA Yasuhiro

食料経済分野ではフードシステム論を中心としながら農産物流通(卸売市場, 産直, 直売所), 食の安全・信頼を支える制度(FCP, GAP), ノウフク(農福)連携, 食育などを, 資源経済学分野では農業農村整備事業, 水利施設維持管理、条件不利地域問題(写真は中国雲南省の棚田)などを対象にして研究してきました。また食料・農業・農村政策の評価や設計に係る仕事にも関わっています。



齋藤 勝宏 / さいとう かつひろ (教授) ゼミ

SAITO Katsuhiko

農業・食料に関連する経済現象とその変化について理論と実証で明らかにしてゆくことを課題としています。特に, 産業間や国・地域間の相互依存関係を重視しています。具体的には, 気候変動と農業生産・所得, 貧困と食料安全保障, 穀物の国際価格変動, 動物の感染症と国際貿易, 農業及び食品産業の国際競争力, 次善の理論から見た関税や補助金の経済学的評価など, ミクロ経済学と数量経済学をベースとする研究を行っています。



櫻井 武司 / さくらい たけし (教授) ゼミ

SAKURAI Takeshi

主としてサブサハラ・アフリカや南アジアの農村を対象にして, 農家家計の貧困をいかに解消するかを研究しています。



八木 洋憲 / やぎ ひろのり (准教授) ゼミ

YAGI Hironori

主にフィールド・ワークをベースとして、農業経営や農村地域の持続性について研究しています。具体的には、都市近郊地域、中山間地域の農業や組織を対象とする研究、水田経営の組織や情報管理に関する研究を行っています。地域の条件をふまえながら、組織を立ち上げてアイデアを行動に移し、適切な協力関係を構築し、新しい技術や環境にいかに対応していくかという、農業経営学の課題が主な研究内容です。



川崎賢太郎 / かわさき けんたろう (准教授) ゼミ

KAWASAKI Kentaro

生産、消費、環境、開発、貿易、政策など様々な研究に取り組んでいます。農林水産省、米国、フランス、ブータンで働いた経験を活かし、国内・国外共に分析対象です。しかし、どんな場合でも、データでメッセージを出すことを心がけています。データの背後に隠された関係性を明らかにする計量経済学や機械学習、人々の行動や市場の動きを数学的に表現するシミュレーション分析などを使って研究を行っています。



中谷 朋昭 / なかたに ともあき (准教授) ゼミ

NAKATANI Tomoaki

食料・農業・農村に関する広範なテーマを対象に、具体的なデータを用いた統計分析や実態調査を通じた研究を進めています。最近では、食に関する消費者選好の分析や、統計的因果推論の手法を応用した農業政策の評価を行なっています。また、ニュージーランドの研究者と共同で、代替肉などの新規食品に対する需要分析も始まりました。このほか、統計解析のプログラム作成や数理統計的な手法そのものに関する研究経験も有しています。



万木 孝雄 / ゆるぎ たかお (准教授) ゼミ

YURUGI Takao

農協を中心とする協同組合や、農業・農村分野の金融・保険などで研究を行ってきました。代表的な成果は、『開発途上期日本の農村金融発展』(2019年)でまとめました。近年は、森林・林業の財政と森林組合などの組織、および畜産の飼料生産について研究を行っています。分析の手法は、金融論や経済組織論などをベースとしまして、現地での聞き取りや統計数値の解析を中心としています。



農業・資源経済学専修のカリキュラム

農業・資源経済学専修(農経)において卒業に必要な単位数は76単位です。その単位数を満たすために、農学総合科目、農学基礎科目、農学共通科目、課程専門科目、専修専門科目から指定された単位以上を取得する必要があります。一定の条件はありますが、農学展開科目や他学部科目を卒業単位として算入することができます。

専修専門科目と専攻に所属する教員が担当する課程専門科目が農経の学びの中心となります。とくに専修専門科目は専修の要ですので、以下で紹介していきます。



農村調査概論

農業・資源経済学を学ぶ上で要となるフィールドワークの方法論について習得する2年次A2タームに開講される必修科目であり、3年次に開講される地域経済フィールドワーク実習の概要を知る上でも重要な科目です。



農業・資源経済学演習

2年次のA1/A2ターム(演習I)、3年次S1・SPターム(演習II)、A1・A2ターム(演習III)に開講される必修科目です。演習IIと演習IIIは3年次に配属されるゼミで履修することになります。ゼミの内容は文献輪読をはじめ、統計処理やフィールドワーク、農業経営者をお招きしての勉強会、他大学のゼミとのインゼミ、先輩の卒論ゼミへの参加などのアクティビティも取り込まれており、少人数でじっくりと学ぶことができます。卒業論文の執筆にも役立ちます。



地域経済フィールドワーク演習

3年次の通年で開講されている選択必修科目です。これは、戦前から行われている農村調査実習の流れをくむ農経の伝統授業で、農経の目玉授業でもあります。受講する学生一人ひとりが①関心に基づいてテーマを設定し、②調査票を作成し、③実際に現地での聞き取りを行い、④得られたデータを分析して、⑤報告書にまとめる、という一連の現地調査の流れを学びます。

この授業では、何よりも、現地での聞き取りを行うことに特徴があります。実際の農業の現場で見る光景や、その場で聞くことができる現場の生産者、JAや役場などの職員の方などとの談話などからは、座学の授業だけでは得ることのできない視座や示唆、考え方を得ることができます。

そして、現地での聞き取りを中心として、事前の調査票設計、事後の分析・執筆という作業を、1年間をかけて行うという点にも特徴があります。つまり調査にあたって自身で設定したテーマで1年間をかけて報告書を執筆することになるのですが、これは卒業論文執筆のためのいい訓練となります。聞き取り内容に文献資料や自身の分析や考察を付け加えて書き上げた報告書の製本、そしてそれをもとにした現地での報告会、学生・教員の前の報告会というフィードバックの機会が得られることでさらなる学びにつなげていくことができます。また、この一連の演習においては教員2名のほかに、大学院生のTAが常にきめ細やか指導や助言にあたってくれるために、大変有意義な経験をすることができます。

農作業実習

3年次SPタームに1日、A1・A2タームに毎週、西東京市の生態調和農学機構(旧東大農場)で実際に農作業と体験する実習で、必修科目に設定されています。一見、「農業経済学」との関連は薄そうに見えますが、とすれば「経済学」に追われがちな私たちに、土をさわり、モノをつくる喜びを感じさせてくれる授業です。水稻の育成から野菜・果樹の管理に至るまで、幅広く農業を体験することができ、さらにはレポートの作成や農家見学も行うことで、短期間ながらも農作業のエッセンスをつかむことができます。

卒業論文

3年次に配属されたゼミで卒業研究を行い、論文を執筆します。

近年提出された卒業論文のタイトル

- ・湛水直播栽培と移植栽培の併用が稲作経営の規模限界に与える影響に関する分析
- ・現代における伝統農法の持続可能性—埼玉県三富地域の落ち葉堆肥農法を対象として—
- ・企業の農業参入と自治体による参入支援の実態分析—栃木県内9市町を事例として—
- ・都市農業経営における援農ボランティアのマネジメントと参加促進条件の解明
- ・オンラインを通じた単発的な雇用が地域農業にもたらす多様な効果—山形県村山地域さくらんぼ生産者における「1日農業アルバイトdaywork」に焦点を当てて—
- ・自然栽培の地域的な普及に必要な条件についての考察—石川県羽咋市の自然栽培事業を事例に—
- ・清酒業界の動向を踏まえた酒造の経営戦略と農業参入との関係について
- ・子ども食堂にとって来てほしい家庭の子どもが来るための要因の検証
- ・ジビエ利活用の現状と課題—先進事例にみる6次産業化との比較から—
- ・集落営農の解散と農業構造変動—山形県酒田市の実態—
- ・都市近郊における農地保全の課題と展望
- ・超過作付慢性地域における転作対応の実態
- ・森林環境譲与税の都市における使途—東京都23区を対象に—
- ・地域ブランド構築における行政の介入と地理的範囲の明確性—兵庫県丹波篠山市の丹波篠山黒豆を事例として—
- ・近江商人の経営思想とステークホルダー—資本主義論の比較—伊藤忠商事を題材にして—
- ・市民緑地契約制度とみどり法人が民有緑地の保全に与える影響—世田谷区の事例より—
- ・営農型太陽光発電を活用した農業部門から進める脱炭素化と地方創生の可能性
- ・伊勢神宮の神饌—各食材の調達方法とその類型化及び宗教的要請について—
- ・非対称モデルを用いたアフリカの穀物価格に対する国際穀物価格と国際原油価格による影響の分析
- ・インドネシアにおけるパームオイル産業の役割とその影響—産業連関分析の手法を用いた経済・環境両面の分析—
- ・水害が農業構造に与える影響—関東地方市町村パネルデータ分析—
- ・有機農業採択の決定要因—海外におけるレビューと日本における実証分析—
- ・農業が生活系ごみの量に与える影響—パネルデータを用いた実証分析—
- ・東京都のトップレストランに対する消費者評価の決定要因—「食ベログ」の口コミ分析を通じて—
- ・圃場別マイクロデータに基づいた中山間地域等直接支払制度下における土地利用実態の解明—岩手県盛岡市玉山地域における20年間の記録—
- ・中央拠点市場制度における新たな指定基準の検討—仙台市中央卸売市場を事例として—
- ・新型コロナウイルス感染症流行下における食品選択行動の変容過程—消費者購買履歴データを用いた食料支出の時系列分析—
- ・「食品ロス」をめぐる新聞記事の計量テキスト分析
- ・地域資源の保全管理に係る農村協働力の形成に関する分析—多面的機能支払交付金における推進活動とそのステップアップ過程に着目して—
- ・ネットスーパーの進展とその意義—東京都の配送エリアの地理情報システム分析—
- ・食の二元論モデル開発に向けた食品信頼感の購買行動への影響の把握—ベスト・ワースト・スケールングを用いて—
- ・非農業就業機会が水稻生産性に及ぼす影響—北陸4県の市町村パネルデータを用いた実証—
- ・マクロ・マイクロ両視点によるサバクトビバッタの影響分析
- ・気象の短期変動と子供の栄養状態—ザンビア農村地帯の高頻度データを用いた分析—
- ・発展途上国における施設配置の効率性に関する計量分析—マラウイの中等学校を対象として—
- ・コメ先物市場における先物取引の気象リスクに対するリスクヘッジ
- ・アメリカ合衆国における大麻合法化の社会経済学的影響
- ・森林のCO2吸収によるJ-クレジットの地域経済への波及効果

大学院

—農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻—

大学院の概要

大学院には、学部卒業後に進学する修士課程(2年)と修士課程修了後に進学する博士課程(3年)とがあります。

大学院において農業・資源経済学専攻に相当する組織は、農学生命科学研究科 農業・資源経済学専攻です。

大学院での研究は、各自それぞれの専門分野に特化した、さらに深いものとなってゆきます。オープンセミナーなど、所属するゼミの枠を超えた専攻全体での議論も活発です。

修士課程大学院生の生活

修士課程の大学院生の入学から卒業までの大まかな流れとしては、まず修士1年次には講義主体のコースワークをこなしながら修士論文の研究テーマを決めることに専念します。大学院では、学部の頃に比べてより専門的で高度な知識を要求されます。したがって、多くの場合、1年目では、授業のある学期中は自分の専門や関心のある分野の授業をとり、研究のバックグラウンドとなる理論や知識の習得に努めます。また、この時、自分の専攻に限らず必要があれば他研究科の授業を履修します。実際、多くの院生が経済学研究科や公共政策大学院の授業を履修しています。夏休みや冬休みなどの長期休暇の期間には、適度に遊びながらも、論文を読んで研究を進めたり、先輩達と一緒に勉強会を開いたり、あまり研究や勉強から離れすぎないようにして過ごします。

2年次には、所属するゼミを中心として修士論文の執筆に本格的に取り組むことになります。農業・資源経済学専攻では、夏と秋に1回ずつ修士論文中間報告会があります。7月の中間報告会では、研究プロポーザルについて議論します。その後、国内外でのフィールドワークやデータの収集整理を進め、11月の中間報告会は、暫定的な分析結果や期待される結論などについて検討した後、修士論文の執筆にとりかかります。翌年1月中旬に論文を提出し、下旬には論文の審査を兼ねた修士論文報告会が開催されます。報告会では、先生方をはじめ先輩方からの質問や意見に対して適切に対応することが求められています。

上記のような基本的な流れに加えて、学部の講義や地域経済フィールドワーク演習のティーチングアシスタントを任される院生や、研究成果を学会で報告したり、論文に纏めて学会誌に投稿している院生もいます。

さらに研究を深めたい院生は、博士課程に進学し本格的な研究生活に入ります。

最近では、博士課程の学生を中心に経済的支援の体制も整いつつあります。

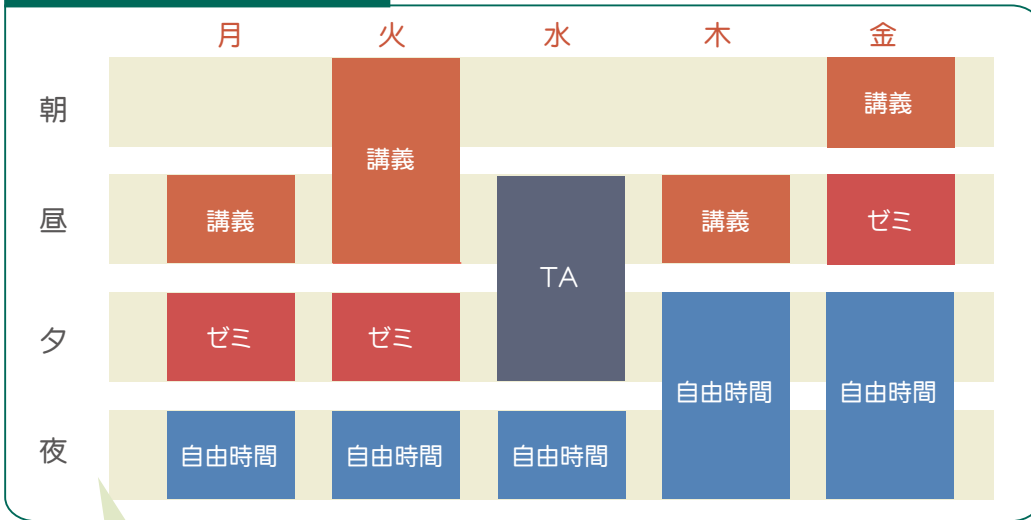


修士課程での研究成果を報告し、先生方や先輩たちからの質問内容について議論します。



大学院生の1週間のスケジュールを紹介します。

大学院生の1週間の生活(例)



講義の予習・復習や研究がメインですが、自由時間には大学のジムに通ったり、アルバイトをしたりするひともいます。院生同士で夕食を食べに行くことも多く、研究内容についての議論が白熱することもよくあります。



最近の修士論文リスト

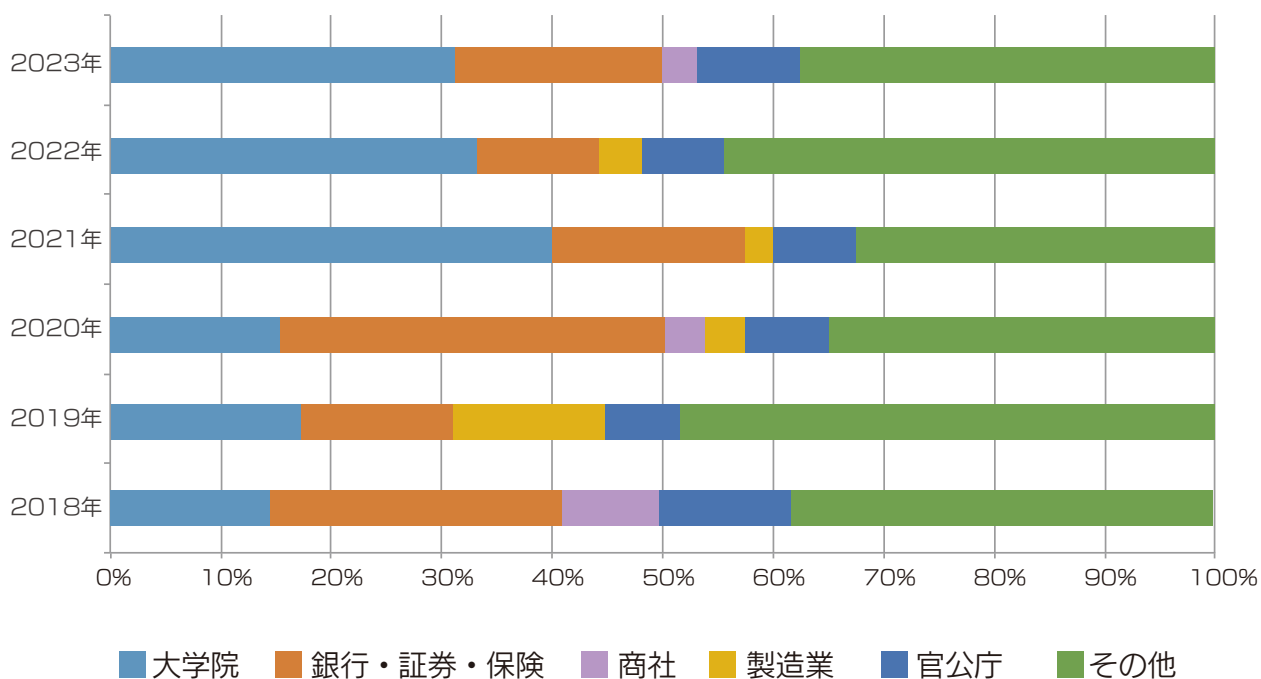
- Improving Rice Farmers' Productivity in Sub Saharan Africa: An Impact Evaluation of JICA's Intervention in Mwea Irrigation Scheme, Kenya
- Vegetable production and its impact on smallholder farmers' livelihoods: The case of the central highlands of Madagascar
- How did COVID-19 affect rural Myanmar? – Impact analysis using delinquency data of a microfinance institution –
- 市区町村間の所得格差とその形成要因
- Polygamy and Agricultural Efficiency: The case of Burkina Faso
- フードリテラシーの形成要因と食行動への影響
- 家計の食品ロスの発生要因に関する分析—消費者の属性や行動に着目して—
- Economic Impact Assessment of African Swine Fever on Farmer – Based on Analysis of Provincial Panel Data –
- 農業法人における正社員採用活動の特質と評価—求人情報と事例調査に基づく分析—
- 露地野菜の契約取引における生育予測システムの導入効果
- 水稲作におけるロボットトラクターの導入効果
- 地域貢献型地熱発電事業の展開過程
- 外食が提供する価値に関する研究
- 「日本型食生活」の方針に関する研究—食育推進基本計画の立案過程に着目して—
- The Analysis of Factors behind Fluctuations in the Exportation of Shandong-gyu from the 1900s to the 1930s
- コメ先物市場が現物市場に与える影響
- Examining the factors which have influence on the scale of rice farming: A prefectural panel analysis focusing on Japanese rice insurance program



卒業後の進路

農業・資源経済学専修の卒業生の大半は就職していましたが、最近は農業・資源経済学専攻をはじめとする大学院進学も増えています。就職先は、金融関係、公官庁、商社、製造業、シンクタンクなど多岐にわたっています。毎年11月になると、3年生のための「就職セミナー」が4年生の手によって開催されています。4年生の体験談や就職活動の荒波を乗り越えるための知恵が語り継がれています。

進路状況



- **大学院進学** 農業・資源経済学専攻、農学国際専攻、経済学研究科、公共政策大学院、新領域創成科学研究科、工学系研究科、総合文化研究科。東大以外では、University of ReadingやUniversity of California Davisなど。
- **金融関係** 三井住友銀行、三菱UFJ銀行、三井住友信託銀行、農林中央金庫、信金中央金庫、みずほファイナンシャルグループ、ゴールドマンサックス証券、メリルリンチ日本証券、野村證券、日本生命、第一生命、住友生命、東京海上日動火災保険、かんぽ生命保険など。
- **商社** 丸紅、三菱商事、三井物産、住友商事など。
- **製造業** キリン、サントリー食品、味の素、日清フーズ、日本たばこ、クボタ、三菱電機、花王、富士フイルム、トヨタ自動車、パナソニック、ソニー、帝人など。
- **官公庁** 農林水産省、経済産業省、厚生労働省、総務省、環境省、会計検査院、日本政策金融公庫、日本銀行、東京都庁、秋田県庁、名古屋市役所、警視庁など。
- **その他** 全農、全国農業会議所、あいち知多農業協同組合、中部電力、電通、野村総合研究所、NTT東日本、楽天、アクセンチュア、A.T.カーニーなど。

先輩の声



農業・資源経済学専修に進学した動機は？

- ・食料問題に興味があり、農業について勉強しようと思った。
- ・フィールドワーク調査など、実態に基づいた経済が学べると考えたから。
- ・理系出身の自分でも、経済を学べるのは面白そうであると思ったから。
- ・文系学部に進学予定だったが、農業や環境への関心から農経の存在を知り進学を決めた。
- ・人の生命の根源となる「食」と「農」について学びたいと思ったことと、フィールドワーク演習に魅力を感じた。
- ・農業と経済の両方を学べると思ったから。



農業・資源経済学専修に進学して良かった点は？

- ・必修が少なく、履修する科目を自分のペースで組むことができる自由度の高さ。
- ・農作業の経験が出来た。
- ・文系から進学しても、溶け込みやすい環境だった。
- ・理系の学科では学べない社会科学的な視点を学べた。
- ・卒業論文の現地調査で様々な人々と出会えたこと。



農業・資源経済学専修の雰囲気の特徴は？

- ・横とタテの繋がりが強く、アットホームな雰囲気。
- ・人数が小規模で親しみやすい。先生方との距離の近さ。
- ・自由で、各自の興味にそった勉強・活動をしているところ。
- ・バランス観があり、おだやか、のんびり、面白い。



地域経済フィールドワーク演習に参加した感想は？

- ・一番楽しかったのは農家に泊まって話し込んだことです。
- ・一連の作業を通し、世の中の問題をいかにして解明するかを学んだ。
- ・現場で実感を伴う学びができた。
- ・農経でこんなことを学んだ!と胸を張って言えるテーマがひとつ身についた。
- ・自分で現場に足を運んで実証分析するというプロセスの大切さを学んだ。



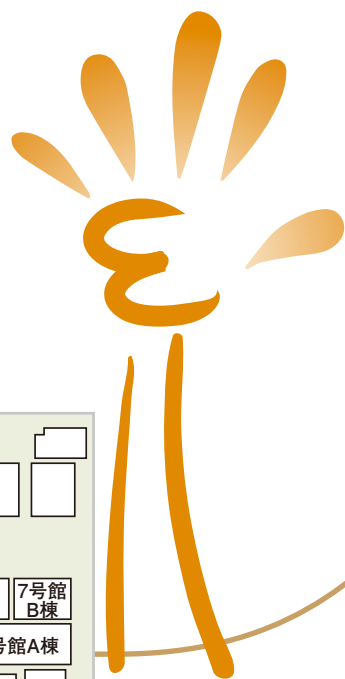
卒業論文作成によって身についたこと・成長したことは？

- ・忍耐力、思考力、論理力。
- ・一連の研究手法が身についた。
- ・毎日3時間睡眠でもやり抜く精神力。自信。
- ・スケジュール管理の大切さ。

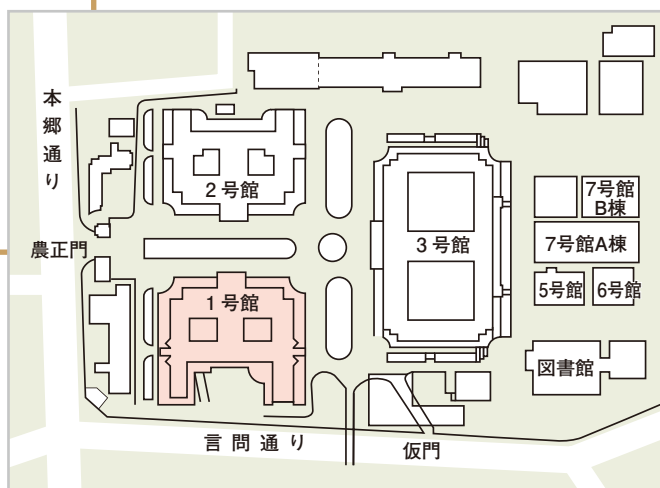
(平成26年度卒業論文報告会でを行った3・4年生に対するアンケート調査から抜粋)



農業・資源経済学専修の窓から
世界の地域が見える



農学部弥生キャンパス



東京大学農学部 農業・資源経済学専修
東京都文京区弥生1-1-1 農学部1号館

<http://www.ec.a.u-tokyo.ac.jp/>